

悪い時代の知識人

中里 成章

『南アジア近現代史』

南アジア研究の共通語は英語である。かくいう私も英語で論文を書いたりしているが、実は私は所得の低い家に生まれ、外国語というものに縁のない環境で育った。そんな私に英語の面白さを教えてくれたのは、伊藤先生という、穏やかでいくぶん沈んだ雰囲気を持たせた、東京の区立中学の英語教員だった。中学三年の七月、その伊藤先生が、夏休みを目前にして

浮き足立つ私たちに、君たちがいいと言ってくれるなら話したいことがあると切り出した。ほくは長崎の原爆の生き残りだ、その体験を話させてくれないか、というのだった。英語を勉強しようと思っただのは、原爆を落とした国がどんな国か知れたかったからだ、と先生は語りはじめた。夏になると私はよく、しんと静まり返った蒸し暑い教室を思い出す。私たちが先

生から聞いた被爆体験と、アメリカの言葉を学びそれを教えることとの間には鋭い緊張があったはずだ。それなのになぜ、先生は敢えてその緊張のなかに身を置いて戦後社会に生きることを選んだのか。

伊藤先生を敬慕して、また、南アジア近現代史という「専門」の枠から自由になって、本の紹介をしてみたい。選んだのは、二〇世紀という悪い時代に向き合って生きた、知識人の生き方を伝える著作二点である。長い研究者生活のなかで、私は何度か立ち止まって、この種の本を手にとったような気がする。伊藤先生もそうすることがあっただろうか。

● アドルノ『ミニマ・モラリア』(法政大学出版局)

トーマス・マンは、屈折した思想遍歴を経て、ファシズムの手強

い批判者となった。ナチス政権によつてドイツ市民権を剥奪されると、アメリカに移住して批判を続ける道を選び、一九四三年から『ファウスト博士』の執筆に取りかかり、四七年に完成した。この

長編小説でマンは、物語の大枠をゲーテの名作のパロディとして設定し、一二音技法を使う前衛作曲家の創作活動と、その内面の崩壊の劇とを描くことを通じて、ナチズムを生み出したドイツ文化の根底的な批判を試みた。この小説は音楽小説としても有名だ。音楽についてマンに助言したのが、同じくアメリカに亡命していたアドルノだった。アドルノはアルバン・ベルクの下で作曲を学んだことがあった。

「傷ついた生活裡の省察」という副題を与えられた『ミニマ・モラリア』は、一五三のアフォリズム

ム的考察の集成である。この切れ味鋭いエッセー群を、アドルノは、不安定な亡命生活のなかで、一九四四年から四七年にかけて書き継いでいった。題材は、副題が示すように、ナチスに追われてアメリカに亡命したドイツ知識人が経験する些細な出来事から取られているが、それらは思いもかけない方向に展開され変奏されて、全体として、二〇世紀の社会現象全般にわたるラディカルな批判となっている。たとえば、巻頭に置かれたエッセーは、「マルセル・ブルーストのために」と題されている。しかし、ブルーストの姿は暗示されているにすぎず、芸術家や学者といったいかにも知的な職業の世界に蔓延する同調主義の病に向けて、批判の矢が放たれるという具合だ。

本書はしたがって、どのような順序でどのように読んでもよいタイプの本に入る。私についていえば、この本に親しむきっかけとなったのは、留学先のカルカットに持って行く本に加えたことだった。留学の年に出た邦訳をたまたま買ったものの、読み終えられなくて、大した理由もなく持つて行くことにしたのだ。ところが思いがけな

くも、この本は、魯迅の『野草』とともに、カルカッタで営まれるインドの人々の生活の過酷さに打ちめされ疲れ切った私の神経を慰める枕頭の書となった。本書を手に取り、たまたま開いたページに見出されるエッセーを読む遊びを、私は何度やったことだろう。アドルノは献辞で、「ここにわが友に捧げるのは憂鬱な学問の一端であり、その関るところは、いにしへの哲学の本来の領域とみなされてきた正しい生活に関する教えである」と述べているが、確かに私は、不条理に満ちた環境のなかであって、「正しい生活」の感覚を取り戻すために、本書を好んで読んだのかもしれない。

逆説的な表現が多用され、決して読みやすいとはいえない本書への道案内として、藤田省三の書評がある（同氏「批判的理性の叙事詩」『精神的考察』平凡社）。知られるように、藤田は丸山眞男門下で、戦後民主主義の輝ける星として活躍し、後に方向転換した政治学者である。この書評で藤田は、亡命生活中のアドルノの立ち位置を、「社会的疎外からも批判を通してさらに自らを疎外しようとする「疎外の辺境」と評し、二〇

世紀知識人のあるべき姿に関して、「二十世紀の認識者たる個人は……、「一九世紀的な」実体的な個人的主体がもはやありえないという喪失感と没落感を公然と表明する勇気を持つ者——持たざるをえない者——の中にだけ、そして同時に物象化する組織や同一化する集団などに決して埋没しようとはしない者の中にだけ、辛うじて創造的に再生する」と書いた。この知識人の像は、藤田の理解するアドルノの姿でもあったにちがいない。

●パトチカ『歴史哲学について の異端的論考』（みすず書房）

昨年の新書ベストセラーに、瀬木比呂志『絶望の裁判所』（講談社現代新書）があった。エリート裁判官だった著者が、日本の裁判所をソ連の強制収容所になぞらえ、裁判官の生活を「目に見えない檻」のなかの生活だと告発している。それが妙に胸にこたえた。『絶望の大学』という本が書かれる日がいつか来るのだろうか。パトチカはチェコの哲学者である。一九七七年、人権擁護を訴える「憲章77」が発表された時、知識人グループのスポークスマンの

ひとりとなり、警察の過酷な取調べを受け、それがもとで亡くなった。一九三〇年代、フッサールがナチス政権の圧迫を受けて逼塞していた時に、使者となってその下に赴き、後に有名になるプラハ連続講演——この講演の内容は『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』のなかに組み込まれた——を依頼したのもパトチカだった。パトチカは現象学研究の先駆者のなかに数えられる人だが、戦後の社会主義体制の下では、パトチカのような哲学者が大学で教授職に就くのは容易でなかった。講壇に立つよりも司書や資料編纂の仕事をした期間の方がずっと長く、しかも発表に制約を課せられた困難な状況のなかで、思索と著述を続けたパトチカの主著のひとつとされるのが本書である。

この本の終章は「二十世紀の戦争と、戦争としての二十世紀」と題され、「震撼させられた者たちの連帯」という概念が提起されている。「震撼」とは、「昼」と「生」と「平和」への信頼を根本から揺るがされ、二〇世紀が「夜」と「死」と「戦争」の時代であることに気づかされることであり、その極限的な形として、第

一次大戦中にヨーロッパの戦線の塹壕のなかで死に向き合った若い兵士たちの経験がある。パトチカはもちろんだ、二〇世紀という時代を捉えたニヒリズムの深さを認識していないわけではなかった。だがこの章では敢えて、「震撼」の経験をぐり抜けて、生と死において真に問題なのは何か、明視することのできるようになった者たちの、迫害され孤立させられることを恐れない、敵味方を越えた連帯こそが、「戦争としての二十世紀」あるいは「戦争状態を永続化させる動員措置」に対して「否」といい、人間的自由の遂行として歴史を現出させる力になると書いて、絶望的希望とも呼ぶべきものを核にする抵抗の思想を説いた。そして図らずも、本書刊行の二年後、この思想に殉じることになった。

鉄のカーテンの内側で思索したパトチカを西欧に紹介するために尽力したのは、ポール・リクールだった。『レクチュール』（みすず書房）にそのパトチカ論「ヤン・パトチカとニヒリズム」が収められている。（なかざと なりあき／東京大学名誉教授）